

## 論文

## マルムティエ修道院の『セルヴスの書』

## — コリベルトゥスの研究 (1) —

宮 松 浩 憲

## I

中世フランス史には謎または未解決の問題として残されているものが少なくない。ここに取りあげるコリベルトゥス Colibertus もその一つであるが、史料と方法論で大きな問題を抱えている。史料における同語の寿命は約200年（10世紀中葉から12世紀中葉）と短かく、その地域もパリの西側一帯、つまり西フランスに限定される<sup>1)</sup>。別稿で掲げる予定の文献・史料目録が示すように、関係する史料は散在の形をとってはいるものの、多いと言えるであろう。しかし、文書史料に関しては、その多くが型にはまった文章に現れているため、推論の展開が制限されている。他方、記述史料は別の視点から非常に興味ある事実を提供してくれてはいるが、孤立していて、文書史料との有機的関連が模索されているところである。方法論においても、これは避けられないことではあるが、フランス中世史全体の流れのなかで非自由人の問題をどのように捉えるかでこの問題への接近がすでに決定されてしまうことが起きている。

従って、以上のような史料状況、および方法論上の問題を理解したうえで、今回はコリベルトゥスの研究で必ず利用されているトゥール在、マルムティエ修道院の *Liber de servis Majoris Monasterii*（以後、『セルヴスの書』と略記）<sup>2)</sup> の

考察に対象を絞ることにした。それは、これまでの研究で配置が狂わされてしまっていたそれぞれの史料を本来の正しい位置に戻す試みでもある。

## II

『セルヴスの書』は中世フランスの非自由人、そして特にコリベルトゥス研究者の間ではよく知られた史料で、トゥール市立図書館に写本 1376 として保管されている。縦24.5センチ、横17センチで、B5版よりも少し大きい。44葉（1綴8葉の5綴半<sup>3)</sup>）の羊皮紙からなり、各葉の表裏に刻針で25本の横線が引かれている。各綴の最初は、上部は朱色または朱色と黒色の組合せによる絵文字で文章を始め、下部の余白には《De Servis》の文言が本文よりもかなり大きめの文字で刻まれている。そしてこの文言は最終綴の朱色を除いて、すべて黒色で書かれている<sup>4)</sup>。各文書には、前の文書の終わりとの間にできた空白部分に、朱色で書かれた、本文よりも少し大きめの文字による表題が掲げられている。多分、この表題は本文よりもあとに書かれたと思われる。なぜなら、この表題と同じ文言が各ページの綴じられていない部分に1行乃至6行にわたって小さな字で記入されているので<sup>5)</sup>。字体に関しては、本文では数名の異なる手が確認され一方、《De Servis》の文言も2, 3名の異なる手（第1綴、第2～5綴、最終綴）によって書かれている<sup>6)</sup>。書体の判別はそれと接する機会をほとんど持ったことのない筆者の能力を超えており、この時代の書体に精通した現地の研究者の見解に従う以外に方法はない。そして彼らはそれを11世紀末または12世紀の初頭か同世紀の特定できない時期の小文字と推定する<sup>7)</sup>。

従って、正式な表題はなかったことになる。但し、《De Servis》の文言が6回も繰り返されていることから、この文言が表題になりえた可能性は否定できない。『セルヴスの書』の表題は17世紀に製本されたさい、背表紙に記されたもの

である<sup>8)</sup>。また、この製本の見返しに《Des Esclaves》、そしてその下に別の筆跡で《Des serviteurs ou commis anciens de ce monastere de Mairemoustier》と書かれている。一方での「修道院の奴隷」、他方での「修道院の使用人または奉公人」といった後世のこのような書き込みからも、この書の評価が定まっていないことを窺い知ることができる。筆者がこの書を『セルヴスの書』とした理由も、ここにある。

それでは、この書はいつ作成されたのか。11, 12世紀の史料でこの書に言及したものを見いだすことは出来ないが、書体からは、既述のごとく、11世紀末、12世紀の初頭と特定できない時期の3つの説が出されている。127通の収録文書は、最も早いのが985年、最も遅いのが1100年であるが、正確には、アンジュ伯ジョフロワ1世(在位958-987年)の在位年から院長ベルナール(在位1084-1100年)の在位年の間に発給されている。換言するなら、最も早いものはジョフロワ1世在位の初年に発給された可能性もあり、また最も遅いものは発給年のはっきりしている1097年以後から1100年までに作成されたことになる。従って、文書の発給年からは1100年以前の成立が可能となる。製本の状態からもこの問題に迫ることができる。既述の如く、最後の綴のみに大きな乱れが見られ、さらにその最初の葉の表面しか使用されていないことから、その前の綴で終わることが予定されていたのではなかろうか。この第5綴の最後の葉に転載されているのが1097年1月3日と明記された文書である。劈頭にも発給年が明記された文書を置いていることを考え合わせると、1097年の上記の文書をもって終わる計画があったと推察してもおかしくはない。この考えは、後述される『付録』に収録された文書の分布によっても補強される。なぜならここでも、1100年以前の文書は全体の約70パーセント(45通)を占めていて、特に11世紀後半に集中しているのに対して、1100年以後は22通を数えるが、連続性は著しく後退しているからである。さらに、最終綴の《De Servis》のみが朱色で書かれていることもこれと関係しているの

はなかろうか<sup>9)</sup>。

もちろん、これらの文書はスクリプトリウムを中心に集められていたと思われるが、この書の作成は誰によって計画されたのであろうか。この書のためにのみ各地の分院から文書が集められたとは考えにくく、大きな編纂事業の一環、またはその副産物として計画された可能性が高い<sup>10)</sup>。その場合、収録されている最も遅く発給された文書をまって、作成が開始されたのか、それとも歴代の院長に引き継がれた事業であったのか。

文書は、ごく少数の例外を除き、基本的には年代順に並べられている。特に集中しているのが院長アルベール（在位1032-1064年）の時代で、全体の70パーセント（89通）を占め、その後のバルテルミ（在位1064-1084年）とベルナール（在位1084-1100年）の2代 — 発給年が2代にまたがっていて、分離することが出来ない — で、全体の24パーセント（31通）と続いている。院長アルベール以前の文書は958年からの74年間で6通しか収められていない。実際に発給数が少なかったのか、それとも散逸した結果だったのか。いずれにせよ、後掲の資料2にある如く、文書分布は11世紀中葉以降、そして特に院長アルベールの時代に異常なほど密集していることが大きな特徴として挙げられる。

『セルヴスの書』は、この時代の同種の文書すべてを網羅してはいない。19世紀のこの書の編者によって後半に、『付録 Appendix』として1040年頃から1269年までに発給された67通の文書が収録されている。従って、1032年から始まる院長アルベールの時代までは、この書の網羅性が一応立証されたことになる。しかし、院長アルベールの時代の17通、次院長バルテルミの時代の4通、さらにはこのバルテルミを継いだ院長ベルナールの時代の16通の見落としはどうして生じたのであろうか。また、同種の文書が院長ベルナールの在職以後も発給されたとするならば — 『付録』には22通が採録されているが —、同書はどうして院長ベルナールの在職を区切りとしたのであろうか。この書は未完で終わってしまったの

か、それとも別の書によって書き継がれることになっていたのか。

しかし結論を出す前に、この書の作者と『付録』の編者とは同じ考えを共有していたのかという肝心な問題を処理しなければならない。この書の編者はどういう規準で67通の文書を追加したのであろうか。彼は、残念ながら、この書の作者の意図を解明していないのである。マルムティエ修道院とは関係のない文書、証人リストにのみセルヴス servus が登場するの文書、寄進・係争文書の主要物件の付属物としてしかセルヴスが現れない文書など、『セルヴスの書』との一貫性を欠く要素が持ち込まれてしまっている。極端に言えば、非自由人を意味する語が使用されている、つまり社会的存在としての非自由人が登場する文書を集めただけにすぎない<sup>11)</sup>。従って、上で「見落とし」の言葉を使ったことの正否が問題になってくる。なぜなら、両者の意図がまったくかけ離れたものであったならば、それは見落としではなくて、意識的に排除したことになり、見落とされた文書の数はずっと問題にならなくなるので。このことから、『セルヴスの書』の作成意図の解明が緊急の課題となってくる。

それでは、この書の作成の意図はどこにあったのか。この書は、前文もなく、直ぐに文書の転写が始まっていて、作成の意図はどこにも明示されていない。従って、総合的な観点から類推するしか方法はなく、その提示も、可能であるとした場合であるが、すべての可能性を考慮したあとになることは言うまでもない。

文書にはどのようなことが記されているのか。それは非自由人 (servus, colibertus) の譲渡 (売却, 交換), 身分解放, 身分や所有権をめぐる係争, 自由人 liber の非自由人化などに分類され, その割合は順番に24紙 (31通), 11紙 (14通), 4紙 (6通), 8紙 (11通), 50紙 (63通) となっている。身分解放による非自由人の減少は11紙に過ぎないのに対して, 譲渡と身分降格による非自由人の増加が全体の4分の3を占めている事実は非自由人の修道院への著しい流入が起きていたことを想像させる。他方, 時代的特徴も確認され, 譲渡や身分解放は10世紀

末から連続して確認されるのに対して、非自由人化の例は、1例を除いて院長アルベールの時代から事実上始まっているのみならず、55例が彼の時代に属している。しかし、文書にはほとんど発給年が明記されていないため、この非自由人化が彼の在任中を通じて続いていたのか、それとも特定の時期に集中していたのかは確認できない。とにかく、彼の時代に大量の非自由人を必要とする事業が開始されていたり、特別な政策が実行に移されたりしていたのであろうか。また、この書の作成はそれと関係していたのであろうか。

『セルヴスの書』には自由人から *servus* になった事例と、その反対の事例とが混じりあって収録されている。確かに、両方の身分を体験したのは同一人物ではあるが、だからといってそれは *servus* だけが表題に掲げられることの十分な説明にはならない。表題として「自由人」のほうを選択する可能性も半分はあったことにならないであろうか。また、自由人になった者を、非自由人の名の下にまとめたりするであろうか。さらに、修道院にとって、非自由人でなくたつたかつての *servus* の文書を作成するのみならず、それを転記して保管しておく理由または利点はどこにあったのであろうか。非自由人から自由人になった者とその反対の者を同一の言葉でくくることが論理的に矛盾していないであろうか。通常、表題はこのような曖昧さを排除した上で付けられるものであることから、各綴の最初のページの下部に記された文言の *servus* の語を自由の対極と解することが適切でないことは明らかである。

この分析結果を『付録』に採録された文書と比較することもできよう。しかし、『付録』に同類の文書があるからとの理由で、それらをこの書の文書に勝手に加えることが許されるであろうか。そうする前に、なぜそれらの文書がこの書から排除されてしまったのかが問われねばならない。そうすることによって、逆にこの書の性格がよりはっきりと見えてくることにもなる。従って、この書の性格づけはあくまでもその内部のみからなされねばならない。

以上から、この書の作成の経緯についてまとめると次のようになる。書体は11世紀末から12世紀のものである。収録されている文書の最も遅いものは11世紀末の院長ベルナールの時代のものである。収録文書の4分の3近くが院長アルベールの時代に集中している。これから早期の着手と回顧的な晩期の着手といった2つの推論が可能となる。前者に関しては、院長アルベールが文書の急増などを前にして、紛失を怖れてテーマごとに文書を編集しようと計画し、その計画が3代にわたって実行され、このテーマに関係する文書が発給されなくなった時点で完成をみたとする考え。後者に関しては、院長ベルナールが前院長であった聖バルテルミの時代に当院の聖性が頂点に達したと判断し、その輝かしい発展の歴史を後世に残そうとしてこの計画を立案したとの考え。

11世紀後半、聖マルティヌスを守護聖人にもつマルムティエ修道院では文書集の大規模な編纂が企てられていた<sup>12)</sup>。それらは地方(Touraine, Anjou, Blaisois, Bretagne, Chartrain, Maine, Normandie, Vendômois, Perche)単位になっていて、今日までに9つの文書集の存在、または伝存が確認されている<sup>13)</sup>。クリュニ修道院とは異なって、マルムティエ修道院は地方に本院に匹敵するような修道院を持つことがなく、修道士の育成はもっぱら本院で行われていたと考えられる<sup>14)</sup>。従って、分院には文書を作成する修道士やそれを保管する部屋はあったとしても、文書集を作成するようなスクリプトリウムやそのための専門家集団は存在していなかったことになる。そのため、各分院に保管されていた文書が大量に本院へ運ばれてきたと考えられる。つまり、すべての文書集は本院以外では作成されなかったと思われる。註4に記したような誤記も、このような事情から派生していたのではなかろうか。従って、『セルヴスの書』もこの大規模な編纂事業の一環であったとするのが妥当な判断であろう。そして、この考えは両者の間に書式の類似性が確認されることから首肯される<sup>15)</sup>。

時代順に並べられていることは晩期の着手の考えに都合のよいものであること

は確かである。しかし3代後の者にとって、最初の文書を正しく並べ直すことはそう簡単なことではなかったのではなかろうか。発給年のある文書は非常に少なく、全体的に明確な手がかりがあるわけではなく、そのため編者自身も発給年の特定に非常に苦勞している。このことは、各代の写字生がそれぞれの代の文書を書き写していったと考えるのが妥当ではなかろうか。この書は小さなもので、一人または二人で数ヶ月のうちに完成するようなものであったと考えられる。しかし、この書にはそれ以上一筆者の目には少なくとも8名の異なる手が確認される一 の書体が確認されているのである。残念ながら、書体からは時代の推移を確かめることはできないが、このように写字生が交代していることは、長期にわたって書き継がれていたと考えることを許すものである<sup>16)</sup>。そして晩期の着手の最大の難点は、当院の頂点が最初の院長アルベールの時代にあって、後は衰退しているとの印象を与える手法がとられていることである。と言うのも、当院の聖性を象徴するものとして自発的な非自由人化(63例)が挙げられるが、そのうち9割近く(56例)が院長アルベールの時代に集中し、残りは院長ベルナールの時代で、その間の聖バルテルミが院長のときは一例も確認されないことである。このような聖者の聖性を貶めるような手法になにか計算があったとはどうしても思えないのである。

最近の研究は文書集編纂の大事業を、文書の急増と係争の多発の観点から1070年から1120年の間に位置づけている。このことから、この書の早期の着手が想定される。当初、筆者は院長ベルナールが文書集の編纂事業のなかで作成を思いつき、実行に移したと考えた。つまり、11世紀を通じてマルムティエ修道院は自らの聖性を広めていき、それと共に西フランスで最大の修道院に発展していった。そして分院の数が最大に達しようとしていた時に聖者が誕生した。修道院がこの2つの面において頂点に達したのを実体験したベルナールがその思い出を永遠に残そうと考えた。そして如何に多くの人々がキリストに倣って自ら無一物になり、



非自由人、つまりキリストの僕になったかを書き残すのが最も効果的だと考えたのではなかろうかと。しかし、この考えは正しいとしても、その発案者に関しては、以上の理由から、かなりの無理があることがわかった。それよりも、その作成はすでに院長アルベールによって計画・実行されていて、後継の2代の院長によって引き継がれたが、自発的非自由人化の流れそのものが衰退していったため、このような完結を余儀なくされたと見た方がよいように思われる。この考えは、同時進行中の文書集の編纂がこの書の完成以後も続けられていたこととも対立しない。この書の作成の意図は、この書の内容を吟味したうえで、聖バルテルミの位置づけを含めて、後述されるであろう。

### III

それでは、この書はどのような現実を我々に垣間見させてくれるのか。まず最初に、自由人と非自由人の身分上の区別が存在していたことがあげられる。自由人はごく一部での *ingenuus* を除くならば、殆どが *liber* と表記されているが、両者には違いがあったのか。旧身分の表記では、前者が使用されているのは2例<sup>17)</sup>のみで、それ以外はすべて後者が用いられている。一度 *liber* の比較級が使用されている<sup>18)</sup> が、これから自由身分の階層性を直ちに引き出すことはできない。他方、身分解放にもこの2つの語が使用されているが、「今日より、恰も自由身分の *ingenuis* 両親から生まれた如く、自由 *liber* であるべし」<sup>19)</sup> の表現に出会う。「自由身分の両親」の表記に関しては、旧身分の場合は *liber*、身分解放の場合は *ingenuus* が慣習的に使用されており、両語は置換可能であったと見るべきであろう。

自由の象徴は何であったのか。まず、自由人には完全な自由人と条件付きの自由人の2種類があったようである。1007/1009年エリベールは身分解放を享受す

るが、そこには「今日より、自由で恰も自由人の両親から生まれたものとしてあるべし。そして如何なる反対もなく、地球の四方に延びる、開かれたどの道をも進むべし」<sup>20)</sup>とある<sup>21)</sup>。これは自由を獲得したコリベルトゥスにも使われている<sup>22)</sup>。さらに、別の文書では自由人の象徴として、弁護士 *advocatus*<sup>23)</sup>、または代訴人 *tutor*<sup>24)</sup> を選ぶ権利が明記されている。そしてこのような完全自由を記した文書は「自由証書 *carta libertatis*」と呼ばれている<sup>25)</sup>。これに対して、1091年マルムティエ修道院長ベルナールはオドン・レコセの息子ロベールを非自由の軛から解放するが、それは彼を聖職者にするためであった。そして、貞淑に生き、修道士を敬い、財を所有することができるが、自由に処分はできない。もしこれらに違反すれば、元の非自由身分に戻る<sup>26)</sup>と定められている。従って、これは自由人でなければ聖職に就けないとの教会規定<sup>27)</sup>を満たすための、条件付きの身分解放でしかなかったことになる。他方、1092年騎士ジョモのセルヴスであったメナールはマルムティエ修道院のセルヴスになる前に、まず同騎士によって身分解放されている<sup>28)</sup>。これは、非自由人の所有権を放棄・移譲する場合、旧領主は一旦身分解放を行わなければならなかったとする A. プティの考えと一致している<sup>29)</sup>。

他方、非自由人の表現としては *servus/ancilla*, *colibertus/coliberta*, *vernaculus*, *mancipium* が使用されている<sup>30)</sup>。使用回数 (*Liber/Appendix*) は *servus* (94回/36回) が他を圧していて、それに *colibertus* (25回/16回) が続いている。*vernaculus* と *mancipium* は990年から1030年にかけてそれぞれ1回の使用のみで、現実を反映していると考えより、古い習慣の残滓と見なすべきであろう。従って、11世紀の第二四半期以降は、非自由人は *servus* と *colibertus* の2語によって表記されていたことになる。

しかし、文書にある *servus* と各綴の下部の余白に大文字で記された *servus* とでは、必ずしも意味が完全に重なっていたとは思われない。後者は表題の意味をもっていたと考えられることから、狭義の *servus*, *colibertus* などを含んだ非自

由人の総称として使用された可能性が高い。但し、このような用法は *colibertus* には認められないが。また、既述の如く、この書における自発的非自由人化が「神の僕」を意味していたとするならば、大文字で記された文言内の *servus* は社会的存在としての非自由人ではなくて、修道院の支配下で修道士または聖職者として生きることを決意した神の僕としての存在を意味していたことになる。

狭義のセルヴスとしては、1032/1064年マルムティエ修道院の修道士がセルヴスのラウルを自由人にして、聖職に就けている例<sup>31)</sup>などがあげられよう。これに対して、広義のセルヴスとしては、1069年自由人と結婚するために身分解放してもらった娘セシル某に関して、セルヴスまたはコリベルトゥスと結婚した場合、元の身分(=セルヴス)に戻ると定められている例<sup>32)</sup>などがあげられよう。また、1032/1084年牧者オトベールは自由人のとき、マルムティエ修道院の非自由人 *ancilla* と結婚、つぎに自由人の女性と再婚するが、これを知った修道院側は提訴し、彼に非自由人(=セルヴス)であることを認めさせている<sup>33)</sup>。このように、マルムティエ修道院が所在した地域においても「身分は低きにつく」原則が守られていたことになる。また、「セルヴスとして *in servum* 寄進したが、それはセルヴスとしてではなくてコリベルトゥスとしてであったと」との表現でも、最初のセルヴスは広義のそれである。セルヴスの職業としては水車番、牧者(2名)、料理人、製パン工、酌係が明記されているに過ぎない。そしてトゥール以外の居住者もでてきているが、彼らが農業に従事していたかは不明である。

コリベルトゥスもセルヴスと同様に、一方的に譲渡されたり売買されたりしている<sup>34)</sup>。また身分解放も、1例<sup>35)</sup>ではあるが確認される。コリベルトゥスの職業としては牛飼、漁師、水車番と、セルヴスのそれと重なっている。しかし、都市以外に居住するコリベルトゥスに関しては、彼らが農業従事者であったかどうかは明らかでない。平均的な世帯構成についても、2乃至6名の子供を含む家族が確認されるが、半分以上が単身者として現れているため、その算出は容易でない。

そして、上記の原則からして、コリベルトゥスの配偶者は同一身分の女性であるが、問題が生じない限り、セルヴスと同様、両者の身分が明かされることはほとんどない<sup>36)</sup>。

セルヴスとコリベルトゥスの関係はどうであったのか。ある文書は同一人物を表題では *servus*、本文では *colibertus* と記している<sup>37)</sup> し、両語は置換可能であったと推量する研究者もいる。しかし、表題は非自由人の総称として使用されていると考えた場合、両語は必ずしも同義ではなかったことになる。次に、身分降格の経路として自由人 → コリベルトゥス → セルヴスが想定される。なぜなら、1032/1064年の文書で水車番のガルドリクが妻子と共にコリベルトゥス身分に落ちている<sup>38)</sup> のに対して、同じ頃の別の文書は自らをセルヴスに降格させた某コリベルトゥスについて語っている<sup>39)</sup> ので。さらに、損害の補償に関して、自由人の場合、コリベルトゥスへの降格が実施されているが、セルヴスの場合、降格されることなく被害者への数年間の奉仕が強制されている<sup>40)</sup>。これは、セルヴスは最下層に位置し、降格する場所がなかったことを意味しているのではなかろうか。コリベルトゥスとセルヴスの序列が逆転している例は確認されない。しかし、コリベルトゥスと同じように、セルヴスは解放によって一気に自由身分に達しており、上記の想定された三区分が確立されていたとすることはできない。さらに、1032/1084年の文書ではガラン某がセルヴスとコリベルトゥスのどちらとして寄進されたのかが争われている<sup>41)</sup>。以上から、資料1にある如く、自由人、セルヴス、コリベルトゥスの関係は、従来の A よりも B に近かったように思われる。

他方、身分解放を特徴づけるものとしては、「自由証書」以外にはとくに認められない。この文書が修道院に保管されただけなのか、そのコピーが被解放者にも渡されていたのかは不明である。これに対して、非自由人化に際しては、十字の印が押された綱を首に巻く儀式と、承認のしるしとして公開で頭の上に4デナリウスの銀貨を載せる儀式の2つがあった。これらの儀式は慣例になっていた<sup>42)</sup>

## 資料1 身分構成とその関係

A	liber	liber	
	servus	colibertus	
		servus	

B	liber	liber	
	servus	servus	colibertus

とあり、その起源の古さを窺わせているが、11世紀の人間がその意味を知っていたかどうかは不明である。前者は託身行為の完了を表し<sup>43)</sup>、4デナリウスの銀貨は人頭税であったと考えられている<sup>44)</sup>。後者の儀式は必ず非自由人化の文書に登場するが、前者は稀にしか見かけないうえ、11世紀末には消えてしまっている。そして、この儀式はコリベルトゥス関連の文書に決して出てこない。但し、唯一の例外と言えなくもないが、コリベルトゥスがセルヴスに降格される文書では、承認として頭上に銀貨を載せさせているが<sup>45)</sup>。このことは、コリベルトゥスになるに際しては、上記の儀式は求められていなかったことを意味する。それはコリベルトゥスがまだ非自由人でなかったことを含意しているのであろうか。

確かに、セルヴスとコリベルトゥスはともに非自由人を構成していた。しかし、上記の諸事例に加えて、両者はそれぞれ固有の *lex* を有していて<sup>46)</sup>、明確な境界をもつ集団であった。さらに、コリベルトゥスがセルヴスより上位にあったことも確かのようなのである。しかし比率からみて、セルヴスの数がコリベルトゥスのそれを大きく上まわっていたように思われる。このことから、上位に位置しながら、その層の薄さや地域的な偏在のために、コリベルトゥスは常に不安定な制度であり続けねばならなかったのではなかろうか。

他方、非自由人化にしろ身分解放にしろ、セルヴスの事例とは頻繁に出会うが、コリベルトゥスの事例はほとんど無きに等しい。それは永遠の自由を神から委ね

られることが目的そのものであることから、中途半端な降格よりも、完全に神に我が身を委ねることとの関連から、中間的隷属よりも完全なる隷属が選ばれたことを意味しているのであろうか。従って、この場合、セルヴスは特殊な意味で使われていることになる。

修道院や世俗領主のファミリア (familia) とセルヴス、またはコリベルトゥスの関係はどうであったのか<sup>47)</sup>。ファミリアのなかにはコリベルトゥスも含まれていたのか。マルムティエ修道院のファミルス (famulus) として、または同修道院のファミリアの一員として、自由人と同様に、非常に多くのセルヴスが登場する。それに対して、コリベルトゥスがそのような者として現れることはない。もっとも、俗人領主のファミルスとしてコリベルトゥスが登場し<sup>48)</sup>、「コリベルタ (coliberta)、ファミルスであるアラルギウスの妻何某」<sup>49)</sup>の文言も見いだすが。修道院のファミリアに所属する自由人 (57例) の中でコリベルトゥスになった者は一人もいない。修道院に所属するコリベルトゥスは確かに存在していたのであるから、彼らは修道院のファミルスではなかった、つまりファミリアを構成していなかったことになる。

コリベルトゥスはマルムティエ修道院によって所有されていたが、自由人とセルヴスを構成員とする同修道院のファミリアには所属することができなかったという事実は何を意味するのでであろうか。家族の場合、それを構成する者たちは完結した形において (両) 親の保護下に置かれると定義した場合、コリベルトゥスはそうではなかったことになる。つまり、もう一人またはそれ以上の別の人の保護下にも置かれていたことになる。共同領主権下に置かれていた非自由人ということになる。これを証明するためには、自由人とセルヴスが共同領主権の対象にならなかったことを証明しなければならない。この問題はこの書の中だけでは解決できないので、稿を改めて論じることにする。

さらに、身分としてコロヌス (colonus) とセルヴスの並列関係が言及されて

いる。この時期、トゥール地方やその周辺地域からコロヌスが姿を消していたことは確かであり<sup>50)</sup>、ここで問題になっているのは法概念のレベルであることは言うまでもない。1007/1010年デュランとその妻レトイザはマルムティエ修道院に譲渡されるが、それまでは世俗領主に「コロヌスまたはセルヴスの状態で隷属させられていた」とある。そして自分の財で自身と子孫を償った<sup>51)</sup>とあり、彼ら二人とも自由人でなかったことは明らかである。この時点で、コロヌスとセルヴスは接近した存在として考えられていたことが理解される<sup>52)</sup>。

狭義のセルヴスの隷属の状態は当人のみならず、文書で明示されている子供、孫を越えて、永遠にその子孫を拘束するものであったことは言うまでもない。また、息子の身分を証明するために、母親が火審を受けようとまでした行為<sup>53)</sup> — 実際は、受ける前に自分の非を認めたのであるが — は自由と非自由の垣根の高さを暴露しているのであるが、これは他の例によっても確かめられるのであろうか。

非自由人化を記した文書には共通して、「セルヴスの条件で *servili conditione*」とか「セルヴスの法に基づいて *jure servili*」仕えるとの文言が記されている。このような表現形式はその中に非自由人を特徴づける人頭税、領外婚税、死亡税<sup>54)</sup>が含まれているとの共通認識が存在していたことを意味していると考えられる。しかし他方では、これは非自由人化にさいしての儀式の具体的記述に逆行している。従って、共通認識の成立とは反対に、11世紀の時点では、非自由人に共通するものが未形成であったために、「セルヴスの条件」や「セルヴスの法」といった抽象的な表現になったとの推論も成立する。ここでは結論を出さないことにするが、ある文書では働く場所の選択が許されてないこと、そして死亡税との関連で、死に際して財産を修道院に遺贈することが定められている<sup>55)</sup>。居住強制は別の文書<sup>56)</sup>からも読み取ることができるが、適正な労働の公正な要求が明言されている文書<sup>57)</sup>があることも事実である。

法的には自由を制限されていたであろうが、それがセルヴスの生活を悲惨にしていたようには思われない。1007/1010年、世俗領主にコロヌスまたはセルヴスとして隷属していたデュランとその妻レトゥイサはマルムティエ修道院のセルヴスになるのであるが、持っていた財産（gazum）でその隷属関係を清算した<sup>58)</sup>とある。さらに、同じ条件ですでにデュランの兄弟2人が同修道院の従属下で働いているとあり、これら兄弟からの誘いがあったものと考えられる。従って、修道院のセルヴスとしての生活は世俗領主に隷属するセルヴスにとっては恵まれたものであったに違いない。また世俗領主のセルヴスも悲惨な生活を強いられていたのではなくて、上記の如く、身分解放を勝ちとるに十分な財産を築くことができたのである。

非自由人化の原因・動機はなんであったのか。もちろん、これは「自分の意志で *sponte propria*」<sup>59)</sup>とある如く、強制されたものではなかった。さらに、文書を読む限りでは、「神への愛に激しく揺すぶられて」<sup>60)</sup>、「神に対する恐れに」<sup>61)</sup>「神から永遠の自由に委ねられるように」<sup>62)</sup>などの表現が示す如く、信仰に起因するものが非常に多い。しかし、宗教的動機を強調しすぎてもいけない。と言うのも、まずこの動機が修道院のファムルスであった者に特徴的に現れているからである。次に、女性の関与が相当見込まれてもいいはずなのに、現実には一例も見られないのである。さらに、自由人からセルヴスに降格した例では、夫婦11例に対して单身男性が48例と全体の8割強を占めているのである。死を前にした老齢の男性が好んでとった方法とすることもできない。なぜなら、文書は必ず将来生まれてくる子供の帰属に言及しているので。従って、これらの男性は、「若者 *jevenes*」<sup>63)</sup> または「幼児 *infantes*」<sup>64)</sup>と明示されている少数を除外するならば、成人によって占められていたと考えて大過なкаろう。男子が多いのも、聖職者にするためと考えれば別に不思議なことでもなくなる。

もちろん経済的理由、つまり困窮も原因の一つではあったが、その例は限られ



ている。1097年牧者オトベールは妻と一緒に非自由人になっているが、それは彼が焼失させた修道院の納屋を弁償することができなかったからである<sup>65)</sup>。しかし次の2例では、利益が法的劣性を圧倒している。1069年マルムティエ修道院の荘官であった男が土地を保有するために、同修道院のセルヴスになっている<sup>66)</sup>。逆に言うと、これは保有関係が消滅すると、非自由人の状態も解消されることを意味している。また、1032/1084年ベルトラン・アニエルは非自由人から購入していたマルムティエ修道院のブール内の家屋の取得を同修道院に承認してもらうことを条件に、妻と息子一人と一緒に身分を降格させている<sup>67)</sup>。この時期、最も賑わっていた商工業地であるブール内での貸家業は確実な現金収入源であったことは間違いない<sup>68)</sup>。

このようにして修道院の非自由人となった者たちの、その後の生活は保証されていたのであろうか。必ずしもそうではなく、自立・自活を前提としていたようである。1084/1100年修道院のファミルスであったベネディクトゥスは非自由身分に降格することによって、1アルパンの葡萄畑を譲り受けるが、奉仕の間に病気になるったり、困窮に陥ったりした場合、20ソリドゥスで修道院に優先的に売却するか、院長の許可をえて領地内のその他の人に高く売ることができるとある<sup>69)</sup>。

上で、院長アルベールの時代から大量の労働力を必要とする事業が始まったのではとの推論を立てたが、それを証明するためには、流入の件数と同時に量、つまり家族の構成と人数を調べる必要がある。と同時に、農村以外においてはとくに大量の労働力が必要となることはないので、居住地の特定が不可欠となる。

まずセルヴスから始めると、1064/1084年には一度に10人の男女のセルヴスが売却されている<sup>70)</sup>。この場合、彼らの相互関係が明示されていないが、1032/1064年毛皮職人のギベールが妻と5名の子供を連れて、セルヴスになっている<sup>71)</sup>。これら2例からは相当量の労働力が流入したことを思わせているが、セルヴス身分に降格した事例(62例)のなかで、6割以上が未婚の男性のみによって占められ、

夫婦と子供の例は9例を数えるに過ぎない。どちらが非自由身分の標準的な家族構成であったかは即断しかねるが、未婚の女性が1例しかないことから、労働力の増強の考えがあったとしても、それが緊急かつ最大の目的であったと見なすことはできない。また、付記されている職業（パン屋、水車番、豚飼、大工など）を見ても、手薄な業種の強化が企図とされていたかもしれないが、大量の労働力を必要とするものではない。

それに注目すべきは、院長アルベールの時代に非自由人となった者の実に60パーセント近くは修道院に所属するファミルスであったことである。さらに、彼らは農村ではなくて、本院が所在するトゥールで生活していたと考えられる。なぜなら、証人リストに共通の名前が確認されるのみならず、トゥール以外に居住していた場合、その居住地が記載されているので。ここには労働力の問題は介在しない。従って、非自由人化の原因は別にあったと考えられる。その一つが宗教的な理由である。これは上で紹介した動機「永遠の自由に与りたいため」とも結びつく。この時期、この種の宗教運動が広範に展開されていたのであろうか。

11世紀から13世紀にかけての二つの密接に絡み合った運動、すなわち築城運動と定住運動によって西ヨーロッパは大きく変貌しようとしていた<sup>72)</sup>。これに対応して、聖界においても修道院改革が実行されて、改革されたベネディクトス派修道院がその影響力を西ヨーロッパ全域に広げていった時代でもあった。とくに11世紀を通じて地域の中心には、教会と隣り合うようにして分院が設立されて、司牧の正常化が推進された<sup>73)</sup>。11世紀のヨーロッパ最大の宗教組織、クリュニ修道院では300人の修道士が生活していたと言われている。アンジェに本院をもつ中規模のサン・トバン修道院でも、修道士の数が57名（1038年）、86名（1060年）、105名（1082年）と倍増している<sup>74)</sup>。このような修道士の急増は本院だけに限ったことではない。各地に建立された分院にも一定数以上の修道士を配属させねばならなかった。クリュニ修道院の場合、既存の修道院を丸ごと支配下に組み入れ

る場合がよく見られたが、マルムティエ修道院の場合、そのような例は殆どなく、新たに分院に修道士を配属しなければならなかった。西フランスで最も多い分院を抱えるに至ったこの修道院はこのような動きにどのように対応したのか。

聖マルティヌス信仰が浸透した西フランスで大きく発展したマルムティエ修道院はアンジュ、ブルターニュ、メーヌの3地方だけで79以上の分院をもっており、各分院に3名以上の修道士が生活していたと考えられることから、少なくとも300名近くの修道士を養成しなければならなかったことになる<sup>75)</sup>。彼らの養成は施設や人員などから考えて、本院でしかできなかったと考えられる。シャト・デュ・ロワル城主ジェルヴェはマルムティエ修道院に同地の教会を寄進するさい、複数の修道士の駐在を条件づけている<sup>76)</sup>。このように、城主以上の高位高官は教会の寄進に際して、当時広く認められるようになっていた修道士の執り成しとしての役割<sup>77)</sup>を強く意識して、彼らの常駐を強く求めていた。実際、本院もこれらの要求に応えている。11世紀の出来事を記した、この修道院で書かれた事績録には、修道士であった双子の兄弟の一人が院長の命令でイングランドへ派遣され、その地で信仰に満ちた生活を送って亡くなった<sup>78)</sup>とあるが、彼も分院での仕事に従事していたに違いない。また、この事績録は敬虔な気持ちからコンヴェルスス(conversus)として修道院に入っていたある俗人に触れている。このコンヴェルススの訳は容易でないが、単なる労働力と考えられていたのではないことは確かで、彼は詩編を学んでいて、50年間この修道院で信仰に満ちた生活を送り、外の分院に派遣されることを望まなかった<sup>79)</sup>とある。つまり、彼は、多分修道士または司祭としての、分院への派遣を拒否し続けていたことになる。さらに『セルヴスの書』でも、同じ頃の出来事として、修道院が所有するようになった教会に配属するために、セルヴスたちが聖職者に叙任されている<sup>80)</sup>のが確認される。

『セルヴスの書』では非自由人化の原因・動機として信仰に起因するものが非常に多いことが指摘されたが、どうしてこの時期にこういう現象がマルムティ

エ修道院に起きたのであろうか。それはこの修道院でのみ起きていたのであろうか。オルデリク・ヴィタリスはこの修道院について、「我々に近い時代では、アルベール、バルテルミ、ベルナール、イルゴ、そしてナント出身のギヨーム（在位 1105-1124年）が院長としてこの修道院を導いていた。彼らは聖性と徳性によって大いに貢献し、その名声は四方八方に広がり、在の人々にも外部の人々にも申し分なく光り輝いた」<sup>81)</sup>と記している。実際、クリュニ修道院と同様に、大勢の聖俗の高位高官がヨーロッパ各地からこの修道院にやってきて、修道服に着替えていたのである<sup>82)</sup>。

確かに、上記 5 名の院長のなかで聖者はバルテルミだけである。彼の伝記は今から 300 年ほど前まではマルムティエ修道院に保管されていたのであるが、現在は伝来していない<sup>83)</sup>。しかし、上述の如く、オルデリクは当院発展の中心人物としてバルテルミだけを特別視せず、前後の 4 名と同等に扱っている。これは伝存する文書の数（資料 2）によっても確認され、在位年の短いイルゴを除けば、4 者の間に大きな相違は確認されない。それよりも目を引くのは、院長アルベールの時代に入って寄進件数が急激に増えていることである。982 年からのプロワ伯ウードによる、クリュニ修道院の支援を受けての改革は、その成果を出すまでに 50 年近くかかったことになる<sup>84)</sup>。17 世紀の史料は分院を増やしたことにバルテルミの最大の功績を見いだしている<sup>85)</sup>が、イングランドへの進出は彼の時代であった<sup>86)</sup>としても、その時代に分院の数がとくに増えたことは検証されていない。従って、画期を置くとすれば、これら 5 名の院長の間ではなくて、院長アルベールの時代の前と後であることは明らかである。

このように、マルムティエ修道院が聖性において異彩を放っていたのであるが、そうであれば、修道院外からも大勢の人々がこの現象に加わっていてもおかしくなかったはずである。確かに、上で紹介した如く、寄進文書に見られる臨終の直前でなくても、俗人が敬虔な気持ちから修道院に入っている。また、死とは直接

## 資料2 文書の分布

	Vendômois	Perche	Blaisois	Maine	Anjou	合 計
1032年以前	12	5	10	0	1	28
Albert	114	52	34	26	8	234
Barthelémy	64	35	20	37	17	173
Bernard	16	39	29	26	5	115
Hilgod	0	11	5	2	3	21
Guillaume	13	42	30	32	12	129
1150年まで	7	8	17	30	9	71

関係しない、修道院への託身行為もあちこちで確認される。これらは魂の導き役としてのこの修道院の名声と密接に関係していたと考えられるのであるが、これらの場合、必ずしも自由身分の放棄を伴うものではなかった。従って、この非自由人化は院自身の事情と深く関係していたように思われる。ともあれ、寄進を伴った託身はすべて文書に記載されていたことは、それらが転写された文書集から明らかである。これに対して、院内で教育されたり働いたりする者に関しては、この種の文書は一切残されていない。ここからも、この書は修道士や聖職者になった者に限定して、このような場合を集めて記すために使われたのではとの推論が成り立つのではなかろうか。

他方、労働力の考えはコリベルトゥスから得られる結論とも合致しない。夫婦と娘3人の家族も見られるが、親と子供が単位となっているのは全体の3割強（8例）に過ぎず、そのうち半分は片親である。残りは单身男性、または单身女性の場合（5割強・13通）、または兄弟姉妹からなっている。兄弟の数も3名が最高である。もしこれが実態を反映しているとするならば、コリベルトゥスの譲渡は労働力の強化からほど遠いものであったことになる、それ以前にコリベルトゥスはすでに家族を形成できなくなっていたか、少なくとも領主層の意図は彼らの

家族の解体を結果としてもたらしていたことになる。

以上から推論されることは、非自由人の譲渡や非自由人化は家族よりも個人が中心になっていて、未成年者も少なくなかったことから、労働力の大規模で早急な増強を第一の目的としていたとは言い難い。このことは、上記の法行為が農村と都市の両方で行われていることによっても確かめられる。さらに、非自由人になった者の多くはすでに修道院のファミリアに所属していた者で、彼らに関しては、単なる身分の変更であって、労働力の増減とはまったく関係ない。そして、上記の非自由人化の件数で気になることは、未婚男性の多さである。これが自由人の家族構成の平均であったのか。それとも修道院や一部の世俗領主のファミリアに特有の現象で、その他の自由人の家族は全く別の構成をなしていたのか。しかし、俗人領主は非自由人のなかの不要になった者を意図的に寄進や売買の対象として選んでいたのか。また、迎え入れる宗教組織はそれによって真の経営改善を達成できていたのか。少なくとも寄進は信仰心と深く関係しており、家族崩壊した非自由人を集中的に宗教組織に寄進したとは考えにくい。

この書から非自由身分の盛衰について何か発言できるのであろうか。もちろん、確かなことは言えないが、コリベルトゥスに関しては、A. Richard によって提示されたその初出（958年）と最終年（1163年）<sup>86)</sup>が無批判に踏襲されてきた。彼らは口を揃えて目安に過ぎないと言っているが、暗黙の内にこれに捕らわれてきたことも事実である。しかし、上で述べた非自由人に関する諸状況は院長アルベールのときに突如として発生したと言うよりも、かなり前から安定した、または衰退へ向かう状態が続いていたことを前提に、この院長のときに政策的にか一時表面化し、それが次の2代まで減少傾向で継続されたと推測される。従って、非自由身分が衰退局面に入っていたことが大前提となる。その兆候は、非自由人の譲渡や身分解放においては、すでに11世紀初期から確認される<sup>87)</sup>のであるが、servus/colibertusの語が1120年代以降は殆ど使用されなくなる。1136年ラヴァ

ルダン城主エメリ・ジェマールは亡父の魂のために、ファミルス・ベルトランに自由を付与する<sup>88)</sup>が、非自由人の名称は使用されていない。1186年マルムティエ修道院の役人であったエルヴェはアメリカナを自由人にするが、彼女はコリアヌスの妻とあるだけ<sup>89)</sup>で、ここでも非自由人の名称はない。それは、非自由身分が消滅したことを示唆しているのであろうか。もちろん、そうではない。それ以後も非自由人の解放は少数ではあるが続けられている。考えられることは、セルヴスとコリベルトゥスの同化が進行していた結果、両者の区別に関する記憶が薄れてしまっていたということである。その結果、両者にとって共通の状態を示す *servitus* が「隷属の軛」、「隷属の鎖」のように使用されるようになり、再び非自由人が問題になるときは、*colibertus* は完全に消えていて、*servitus* 使用の流れのなかで、非自由人の総称として使用されてきた *servus* の語で代表されるようになったと言うことである。

最後に、この書の作成の意図についてまとめることにする。身分解放の場合(14通)、時代的な偏りもなく、その一部の文書(5通)に聖職に就かせるとの文言が入っており、明らかに修道院の政策に沿ったものである<sup>90)</sup>。修道院への譲渡・売却の場合(31通)、2例を除いて、その法行為後のことは言及されていない。所有権が移行した以上、それは当然のことである。また、修道院が自身の政策に沿って彼らを自由に使用することができることを意味していた。自発的な身分降格、つまり非自由人化では「in servum」の文言が共通して使用されている。これは広義の意味、非自由人の総称として使用されている。そして、修道士に *famulare* するとある。修道士が神に仕えることも *famulare* で表現されているのである。因みに、ファミルスにはこの語は使用されていないが。ここに、用語において両者が完全に一致していることが確認される。非自由人化のあとについては、文書112が示唆的で、そこには、院長バルテルミと修道士がセルヴス、モリスをそのままの状態に聖職者にしたとある。身分解放されることなく、聖職に

ついていたことになる。このような事情を考慮した場合、用語法とも関連して、当事者たちは法行為のあとも身分に関係なく、神の僕として修道院に奉仕することが予定されていたように思われる。

この書で非自由人の呼称として最も多く使用されているのが *servus* であるが、1つの法行為だけは別である。それは非自由人の譲渡・売却の場合で、6割がコリベルトゥス、2割がセルヴスという割合になっている。従って、この法行為が受譲者双方の利益を考えての選択であるとするならば、上述のごとく、コリベルトゥスを共同領主権下にある非自由人とする A. プティの説が有効になってくる。さらに、この説に立った場合、この法行為によって共同領主契約が解消されたことになり、身分解放が行われない限り、コリベルトゥスのすべてがセルヴスに組み込まれていたことになる。このことはこの書がセルヴスを対象としてものであるとする考えを補強することになる。ともあれ、この書で使用されているセルヴスには最狭義のセルヴス、コリベルトゥスを含んだ非自由人の総称、そして神の僕としてのその3つが併存している。さらにこの問題を複雑にしているのは、文書書式の伝統主義である。非自由人化の文書の書式はほとんど同じで、それはメロヴィング時代の書式集にまで遡る<sup>91)</sup>。修道院はそれぞれの法行為に適した新しい書式を考案するよりも、伝統的な書式で対処しようとしたように思われる。こうして、『セルヴスの書』の編者が陥ってしまったように、これまでの研究は表面上の共通性にまどわされて現実の相異を無視してきたのではなかろうか。

院長アルベールの時から始まったと推定したが、最初の写字生が転写した文書のなかに院長バルテルミの時代のものが5通が含まれている。従って、計画は前からあったとしても、この書が実際に書き始められたのは院長バルテルミの時代（在位 1064-1084年）からとなり、同院長の聖性との関係は否定されることになる。また、この書の中ほどに転写されている文書5通が、編者に従って、11世紀末までに発給されとするならば、それより後に配置された文書はこの発給年のあ



とに転写されたことになる。しかし、編者が想定した発給年の幅が1000年または1032年から1100年までとあまりにも大きすぎる。加えて、その内の一通の発給年に関しては、最近の研究によって、1049年以前と比定されている。従って、この書に含まれる大半の文書は院長バルテルミの時代に転写されたあと、残りは次院長ベルナールの時代に同時代のものが、書き漏らしていた古い時代のものとともに転写されたと推定される。

#### IV

以上を要約すると、次のようになろう。

まず、『セルヴスの書』から始めると、非自由人に関する文書の年代的分布は、院長アルベールの時代を取り除くと、如何なる異常も見られない。これと同じ推移は周辺の修道院に関して共通して確認される。共通の傾向が認められる他の多くの修道院においてこの種の作品は作成されていないか伝存していない事実は、この書の作成の理由が院長アルベールの時代と深く関わっていたことを示している。そして同院長の時代でとくに目につくのが、異常な数にのぼる、修道院のファミリアに属する自由人の自主的な非自由身分への降格である。これは彼の時代に初めて確認されることであると同時に、後続の院長の時代には急減してしまっている。つまり、それは彼の時代に固有の現象であると言えることができる。そしてこの大量の降格はファミリアの構成員であったことから、労働力の強化とは無関係であったことがはっきりした。次に目につくのが、これらの文書には悲壮感を生じさせる文言が一切使用されていないことである。そこで強調されているのが、「神への愛」、「神に対する恐れ」、「神から永遠の自由に委ねられるように」といった信仰心である。従って、信仰心からの身分降格と見ることができ、《in servum》の文言にも、表題と見られる《De Servis》と同様に、「神の僕」とし

ての意味が込められていたことになる。従って、この書の編者は『付録』を付すことによって、「神の僕の僕 *servus servorum Dei*」で始まる教皇文書に世俗の証書を付け加えたことになる。しかし、このような信仰心の昂揚は周辺地域では全く確認されていないことから、短期間で突出した数の分院を所有するにたったマルムティエ修道院に固有の現象であったとすることができる。さらに、後続の院長によって積極的に継承されていなかった事実は人材が十分確保されたか、この信仰心が修道院内で広く長く維持され続けることがなかったことを示唆している。ファミリア構成員から自発的にというよりも、院長個人の働きかけが非常に強かったように思われる。そして、俗人による非自由人の譲渡・売却の多くも、この働きかけと深く関係していたように思われる。また、文書の内容からして、将来に備えて非自由人関係の係争を記した文書が系統的に収録されているとも思われえない。従って、この書に収められた非自由人と非自由身分に降格した人々に関する文書とファミリア構成員の身分解放、非自由人の身分・所有権をめぐる係争に関する文書はすべて、院長アルベールの人材確保の政策と関連していたことになる。

次に、この書を通して得られた非自由人の実態に移ると、院長アルベールの特異な時代を別にするならば、マルムティエ修道院の事情は決して特殊なものではなく、周辺の修道院でも共通して確認されるものであった。

自由＝非自由の観念によって社会は自由人 (*liber*) と非自由人 (*servus*) に分けられていた。前者は完全な自由人とそうでない自由人に分かれていたのと同じく、後者も同一名称のセルヴスと、それからはっきりと区別されたコリベルトゥスからなっていた。両者の上下関係は微妙であるが、コリベルトゥスがセルヴスより上位であることはあっても、その逆はなかった。また、コリベルトゥスになるに際して、セルヴスに特有の儀式も負担も確認されない。そして、非自由人を特徴づける3つの負担は11世紀においてはまだ未完成であった。

コリベルトゥスの語は1163年の文書を最後に史料から消えてしまうが、連続で現れるのは1120年代までである。コリベルトゥスの非自由身分に占める割合は、言及の少なさから、非常に低かったと思われる。身分自体の不安定さや、絶対的服従の観点からの修道院ファミリアからの排除などの存続を阻害する要因が加わり、12世紀初期にはセルヴスのなかに吸収されてしまったように思われる。

土地台帳のような統計資料がないため、非自由人の平均的な家族構成を描き出すことは容易でない。しかし、文書を読むかぎりでは、家族としてよりも個人として現れることが多い。文書に現れる非自由人は特殊な一部で、その一般化は慎むべきとの声上がるかもしれない。しかし、これは係争関係以外の文書でも広く確認されることであり、ましてや修道院が自分たちに不利になるような特殊な者たちを積極的に受け入れていたとは到底考えられない。差し当たり考えられるのは農村と都市の相異である。10世紀まで非自由人は主として土地の付属物として現れていたのであるが、11世紀のとくに後半に入ると、土地との結びつきが弛み、人間が中心に位置するようになる。11世紀に入っても、非自由人が土地の付属物として寄進されていることから、農村と平行してかそれ以上に、貨幣の時代に入った都市部における人間の移動が激しくなったと想像される。ここから農村における安定と、都市部における流動性を読みとることができる。もしこれが正しいとするならば、単身者の高い比率についても一応の説明ができることになる。

非自由の刻印は身分解放以外に未来永劫消えることはなかった。しかし、係争文書からは、異身分間や異集団間で結婚が行われていた印象を受ける。非自由人の生活も決して苦しいものではなかった。農村では家屋、耕地、葡萄畑が相続財産として認められている。そしてとくに都市部では、貨幣経済の発展のなかで、経済的利益が法的劣性を意味のないものにしようとしていた。非自由人が問題になる場合、女性が単独で現れることは非常に少なく、ほとんど男性に従属して登場する。

しかし、こういった自由＝非自由の関係が唯一当時の社会を規定していたのであろうか。王権が弱体化し、城主権力が乱立するなかで、身体を安全を欠いた身分解放はどういう意味を持っていたのであろうか。全体から見て、身分解放は少ないし、貨幣経済の進展のなかで、金銭による身分解放も確認できない。非自由人の生活において自由＝非自由関係は大きな障害にはなっていなかったことになる。それはさらに、非自由の観念が希薄になろうとしていたことを意味する。これに対して、ここ数十年の新しい研究傾向として、このような法的な身分規定は公的観念の希薄化によって意味を失い、バン領主権などの実際権力による支配＝従属の新しい考えが提起されている<sup>92)</sup>。確かに、文書からは領主側には非自由身分を維持していこうとの強い意図が感じられない。しかし、11世紀を通じて両者は共存する形をとり続けたと考えられる。

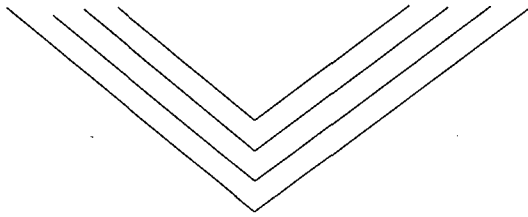
〔 註 〕

- 1) この地域は、奇しくも、もう一つの謎であるファクトゥス Factus のそれと重なっている。ファクトゥスに関しては、拙稿「《Factos, id est mansos》— フランク期西フランスの土地制度 —」(『産業経済研究〈久留米大学〉』29の4, 平成元年), 29-103頁を参照。なお、この論文の一部は H. Miyamatsu, 《Factos, id est mansos》. Régime agraire de l'Ouest de la France à l'époque franque, dans C. Laurent, B. Merdrignac et D. Pichot(ed.), *Mondes de l'Ouest et villes du monde. Mélanges en l'honneur d'André Chédeville*, Rennes, 1998, p.437-444 で仏語訳されている。
- 2) この書は A. Salmon et Ch. -L. Grandmaison, *Le Livre des serfs de Marmoutier*, Tours, 1864 (*Mémoires de la Société archéologique de Touraine*, t. XVI) で刊行されている。
- 3) 第5綴までは完成品である。つまり、下の簡略図(資料3)にあるごとく、4枚の羊皮紙からなる8葉の裏表が完全に使用されている。これに対して、第6綴は6葉の羊皮紙からなる不完全なものである。つまり、第1葉は中央の折曲部分の近くで両側が切断されている。第2葉も折曲部分の右側で切断され、その先に別の羊皮紙が貼りつけられている。第3葉は反対に右半分が完全に残されているのに対して、左側は折曲部分の近くで切断されている。第4葉は第2葉と同じであるが、切断されたままで別の羊皮紙が貼り付けられてはいない。第5葉は第1葉

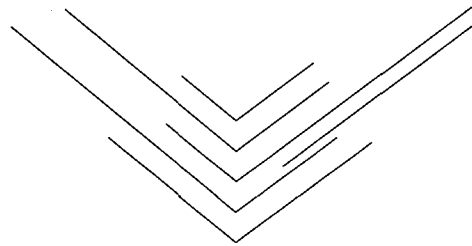
と同じである。従って、字が書ける状態にあったのは第2葉の表裏、第4葉の表裏、第8葉の表裏、第9葉(貼り付けられた羊皮紙)の表裏というきわめて変則的なものでしかない。

## 資料 3

第1綴～5綴



第6綴



- 4) この書は誰によって作成されたのかは確定できないが、不注意があちこちで確認される。まず、名詞の格変化の誤り、脱字、誤字が散見される。次に、表題と本文で当事者の身分や名前の綴りが異なっている。さらに、表題ではポワトゥ出身とあるのに、本文ではベリ出身となっていたり、近隣の地方名の誤記に関しては、単なる不注意というよりも、知識の欠如と言わざるをえない。このように、写字生は高い教養の持ち主であったとは言い難い。上からの指令で集められた文書を転写したに過ぎない。
- 5) 当初、この書の横幅はもっと大きかったと思われる。と言うのも、この文言が切断されていて部分的にしか確認できないものが少なくないからである。また、表題と本文の字体は異なっており、別の人物が後からこの部分を見ながらまとめて書いていったものと考えられる。
- 6) 前世紀の初頭に P. コルマンが当該修道院の文書に詳細な考察を加えている。残念ながら、これは未刊であるが、それによると『マルムティエ修道院文書集・ヴァンドーム地方編 *Cartularium Vindocinense*』は全部で15名の写字生によって書き継がれているとのことである。Cf. D. Barthélemy, *La société dans le comté de Vendôme*, Paris, 1993, p. 33. 因みに、P. コルマンの学位論文は次の通りである。P. Colmant, *Etudes de diplomatique privée française. Les actes de l'abbaye de Marmoutier jusque vers le milieu du XII<sup>e</sup> siècle*. Thèse de l'Ecole des chartes, manuscrite, 1907 et Position des thèse de la promotion de 1907, Mâcon, 1907, p.1-6.
- 7) この書の編者 Ch. L. Grandmaison は作成年を11世紀末に置いているのに対して、H. Stein の書では12世紀となっている。Cf. A. Salmon et Ch.-L. Grandmaison, *Le Livre des serfs*, p. V; H. Stein, *Bibliographie générale des cartulaires français ou relatifs à l'histoire de France*,

1907, p.323. 『セルヴスの書』の表表紙の見返しに「12世紀の初頭 XII<sup>e</sup> siècle (commencement du)」という書き込みがある。

- 8) S. Salmon et Ch.-L. Grandmaison, *Le Livre des serfs*, p. VI.
- 9) 1113年にマルムティエ修道院に人頭税の納付を更新した servus たちが記載された文書 rotulus — Appendix で50番の番号が付されて公刊されている — の裏面に同じく《De Servis》の文言が見える。しかし用紙の規格が縦28センチ、横13センチとそれ以前のものと異なっていて、刻針で引かれた横線も49本と非常に多い。この他、『セルヴスの書』とは書体、記載形式も異なる。全部で9件の法行為は本院内の参事会室、衣食住係室などで行われている分院、その他と分かれており、それぞれの場所で文書が作成されたあと、本院に集められてこの巻物にまとめて転写されたと考えられる。この時、すでに非自由人の書が目前にあったことを示唆している。つまり、この巻物が作成される以前に、非自由人の書は完成していたことになる。
- 10) Cf. D. Barthélemy, *La société dans le comté de Vendôme de l'an mil au XIV<sup>e</sup> siècle*, p. 19-83. この書に収められた文書の一部 (n<sup>os</sup> 15, 16) に関しては、そのオリジナルが伝存している。
- 11) もちろん、『付録』に収められた文書からも同様に興味ある知見を得ることができる。例えば、1070年の文書 (n<sup>o</sup> 29) はセルヴスのイルドラがコリベルトゥス身分の女性と結婚していたことを明らかにしており、非自由身分における婚姻は異なる集団の間でも行われていたことを示している。また、非自由人の所有に関しても、複数の領主によって共有されている場合、直ぐに分割されたのではなくて、その前に共有期間が設けられていたようである。その場合 communis の語が使用され、それから partior が使用されている。なぜ2段階に分けられていたかに関しては、いろいろな理由があげられよう。1084年の文書でその分割が行われているが、揺籃で眠る幼女に関しては、生き延びて分割の取り決めが行われるまで、修道院と世俗領主との間で共有 communiter されるとある。ある一定の年齢に達しないと、分割は行われなかったことになる。さらに、夫婦の帰属する集団によって分割の方法が異なっていた。夫婦ともコリベルトゥスであれば、彼らの子供は両方の領主によって折半されるが、夫がセルヴスで妻がコリベルタの場合、子供はすべて父親に帰属するとされていた。しかし、夫婦の身分が反対、つまり妻がセウヴァで夫がコリベルトゥスの場合でも、同じであったのであろうか。これに関する詳細な考察は別稿に譲ることにする。
- 12) D. Barthélemy, *La société dans le comté de Vendôme*, p. 33.
- 13) H. Stein, *Bibliographie générale des cartulaires*, p. 321-324.
- 14) 拙著『西欧ブルジュワジーの源流 — ブルグスとブルゲンシス —』(九州大学出版会 1993年), 291-321頁参照。
- 15) 文書と文書の間に置かれた表題、その表題の形式、その清書のために余白に書か

れた 仮の表題などがそうである。

- 16) 前出註 6) 参照。
- 17) Chartes n<sup>os</sup> 110, 120.
- 18) Charte n<sup>o</sup> 68.
- 19) Chartes n<sup>os</sup> 13, 50, 52, 59 etc.
- 20) Chartes n<sup>os</sup> 13, 51, 59.
- 21) Cf. charte n<sup>o</sup> 13. これは1009年頃ブロワ伯ウード2世がヴァンドーム城でサン＝テニャン修道院のファムルス、エリベールを聖職に就かせるために自由を付与したときの自由証書である。ここにも上記の文言が使用され、解放後の条件は一切明記されていないのに対して、11世紀末に発給される、聖職に就くための身分解放文書ではこの文言も「自由証書」の表現もなく、自由が大きく制限されることになる。
- 22) Charte n<sup>o</sup> 73.
- 23) Charte n<sup>os</sup> 52, 50.
- 24) Charte n<sup>o</sup> 59.
- 25) Charte n<sup>os</sup> 52, 50.
- 26) Charte n<sup>os</sup> 14, 12, 49, 71.
- 27) Fr. Olivier-Martin, *Histoire du droit français des origines à la Révolution*, Paris, 1951, p. 249 (『フランス法制史概説』 塙浩訳 創文社 1989年, 375頁)
- 28) Charte n<sup>o</sup> 113.
- 29) A. Petit, *Coliberti ou culverts. Essai d'interprétation des textes qui les concernent*, Limoges, 1926, p. 42.
- 30) これ以外に, homo, famulus, mulier が非自由人として登場してくるが, この語には法的意味はなく, 後続の文章の内容によって規定されてくるに過ぎないので, 除外できる。
- 31) Charte n<sup>o</sup> 49.
- 32) Charte n<sup>o</sup> 76.
- 33) Charte n<sup>o</sup> 108.
- 34) Charte n<sup>o</sup> 101.
- 34) Chartes n<sup>os</sup> 1, 4, 7, 16, 21, 23, 28, 31, 43, 47, 48, 60, 62, 66, 74, 88, 89, 103, 104.
- 35) Charte n<sup>o</sup> 73.
- 36) Charte n<sup>o</sup> 16では, コリベルトゥス, ジャンの妻が同一身分の女性であることが明記されているが, これは例外である。
- 37) Charte n<sup>o</sup> 65.
- 38) Charte n<sup>o</sup> 55.

- 39) Charte n° 43.
- 40) Charte n° 6.
- 41) Charte n° 101.
- 42) 《ex more》 in charte n° 20; 《ut est consuetudinis》 in charte n° 43.
- 43) Charte n<sup>os</sup> 37, 38.
- 44) Charte n° 20.
- 45) Charte n° 43.
- 46) Charte n<sup>os</sup> 23, 101.
- 47) 修道院のファミリアに関しては、cf. U. Berlière, *La familia dans les monastères bénédictins du Moyen Age*, Bruxelles, 1931 (Mémoires de l'Académie royale de Belgique, tome XXIX.)
- 48) Charte n° 62.
- 49) Charte n° 7.
- 50) トゥール地方における使用の最終年は851年である。Cf. J.-J. Bourassé, *Cartulaire de Cormery (Mémoires de la Société archéologique de Touraine, t. 12)*, Tours/Paris, 1861, n° 19.
- 51) Charte n<sup>os</sup> 10, 63.
- 52) 前出註 50) のコルメリ修道院文書には「他方, colonus の状態の下に置かれた, これら上掲の servi または ancillae」 《hos vero servos vel ancillas superius nominatas, sub conditione colonorum constitutos》との文言に出会う。
- 53) Charte n° 127.
- 54) Fr. Olivier-Martin, *Histoire du droit français*, p. 251-2 (『フランス法制史概説』 埴浩訳 377-8頁)
- 55) Chartes n<sup>os</sup> 20, 57, 94.
- 56) Charte n° 65.
- 57) Chartes n<sup>os</sup> 10, 63.
- 58) Charte n° 63.
- 59) Charte n<sup>os</sup> 20, 27.
- 60) Chartes n<sup>os</sup> 2, 17, 18, 19, 30, 32-38, 40, 79-87, 92.
- 61) Chartes n<sup>os</sup> 24, 25, 29, 39, 41, 45, 46, 93, 94, 119.
- 62) Chartes n<sup>os</sup> 22.
- 63) Chartes n<sup>os</sup> 12, 121.
- 64) Charte n° 44.
- 65) Charte n° 127.
- 66) Charte n° 76.
- 67) Charte n° 3.



- 68) 商業地としてのブールについては、前掲拙著、53-176頁参照。
- 69) Charte n° 120.
- 70) Charte n° 5.
- 71) Charte n° 77.
- 72) M. Bloch, *Les caractères originaux de l'histoire rurale française*, 2 vol., Paris, 1968(1931), t. 1, p. 4; G. Duby, *L'économie rurale et la vie des campagnes dans l'Occident médiéval*, 2 vol., Paris, 1962, t. 1, p. 141-69; R. Boutruche, *Seigneurie et féodalité*, 2 vol., Paris, 1968, t. 2, p. 11-39.
- 73) 前掲拙著、291-321頁参照。
- 74) *Cartulaire de l'abbaye de St.-Aubin*, n°s 27, 30, 31. Cf. G. Duby, Le budget de l'abbaye de Cluny entre 1080 et 1155. Economie domaniale et économie monétaire, p. 61, in Id., *Hommes et structures du Moyen Age*, Paris/La Haye, 1973 (*Annales: Economies, Sociétés, Civilisations*, 7, avril-juin, 1952, p. 155-171)
- 75) 前掲拙著、310-12頁参照。
- 76) *De rebus gestis in Majoris-monasterio saeculo XI*, in *Acta sanctorum ordinis sancti Benedicti, in saeculorum classes distributa*, ed. L. d'Achery/J. Mabillon, 9 vol., Venezia, 1733, vol., 9, p. 393.
- 77) J. Le Goff, *La naissance du purgatoire*, Paris, 1981, p. 170-3.
- 78) *De rebus gestis in Majoris-monasterio saeculo XI*, chap. 9 (p. 399)
- 79) *Ibid.*, chap. 14 (p. 402) 1032/64年の文書 (charte n° 55) には Isembertus monachus conversus が法行為の証人の一人として現れている。
- 80) Chartes n°s 49, 71, 73, 112, 114.
- 81) Orderic Vitalis, *Historiae ecclesiasticae libri tredecim*, ed. A. Le Prevost, 5 vol., Paris, 1883, tome II, p. 164.
- 82) Ed. Martène, *Histoire de l'abbaye de Marmoutier*, 2 vol., Tours, 1874-1875 (*Mémoires de la Société archéologique de Touraine*, t. XXIV et XXV), vol., 1, p. 276-550.
- 83) *Acta sanctorum ordinis sancti Benedicti*, vol., 9, p. 388.
- 84) Ed. Martène, *Histoire de l'abbaye de Marmoutier*, vol., 1, p. 204-75.
- 85) *Ibid.*, p. 449.
- 86) A. Richard, Les colliberts, in *Mémoires de la Société des Antiquaires de l'Ouest*, t. 39 (1875), Poitiers, 1876, p. 7.
- 87) Charte n°s 13, 50, 52, 54 etc.
- 88) Appendix, charte n° 53.
- 89) Appendix, charte n° 58.

- 90) 文書 50 と 51 は、前者に聖職者にするとの文言あるだけで、ほとんど同じ内容の身分解放である。ここからも、身分解放が聖職に就かせることを前提としたものであったとの考えが導き出されるのではなかろうか。D. バルテルミも、身分解放のあとに完全に自由な状態が来ていたのではないとして、文書の文言を字義通りに解釈することを拒否している。Cf. D. Barthélemy, *La société dans le comté de Vendôme*, p. 40-42.
- 91) *Formulae Merovingici et Karolini aevi*, ed. K. Zeumer, Hannover, 1886, MGH, Legum section V: *Formulae*, p. 11, 30, 57, 93, 95-6, 140-2, 172 etc.)
- 92) G. Duby, *La société aux XI<sup>e</sup> et XII<sup>e</sup> siècles dans la région mâconnaise*, Paris, 1971 (1953), p. 201-208.